

茨城県歴史の道調査事業 日立市域報告

島崎 和夫

目次

1	田中内・大橋宿	3
2	森山・大沼宿	6
3	下孫宿	7
4	助川宿	10
5	田尻・小木津宿	13
6	伊師町宿	18
	岩城海道図	19
	図	20
	表	25

まえおき

本稿は、茨城県教育委員会が二〇一〇年度から二〇一四年度まで実施した歴史の道調査事業のうち最終年度に刊行された『茨城県歴史の道調査事業報告書近世編Ⅲ 「岩城相馬道」「棚倉道」「南郷道」「那須道」「宇都宮道」「飯沼道」』（以下、茨城県歴史の道近世編Ⅲと略す）に収められた「岩城相馬道」のうち日立市域部分については調査員として参加した島崎和夫が執筆した。

しかし、与えられた紙幅を大幅に超過したため、短くして『茨城県歴史の道近世編Ⅲ』に掲載した。

本稿は短くする前のロング・バージョンです。今となつては追加したい事項も数多くあるが（ウェブサイト「日立市の歴史点描」 <http://saki-archives.com/index.html> <近世> に関連記事があるので参考にされたい）、十年ほど前の仕事をそのままに紹介します。『茨城県歴史の道近世編Ⅲ』が入手困難な今、幾分かでもみなさんのお役にたてばと考え、今回テキスト化して公表するものです。

二〇二二年九月一日

島崎和夫

1 田中内・大橋宿

久慈川の渡しから下土木内・釈迦堂村 久慈川の渡しの運営方法について寛永十一年（一六三四）石神と久慈の村民が水戸藩に提出した証文がある⁽¹⁾。

指上申手形之事

一、往来之衆上下によらず夜中をかぎらず、又は大かたの風吹申候共無油断舟を渡し可申事

一、商人荷のうんちん、ぜんぜんより取来し外、老せんもおほく取申まじく候事

一、渡し舟常に無油断そうじ可仕事、右被仰付候旨少も相そむき申まじく候、もし相そむき申候はゞ何様にも御法度可被仰付、為後日一札さし上申候、仍如件

この渡しが岩城海道か、村松からの浜通りか、わからないが、いずれにせよ渡船運営の規定として広く通用する内容である。

なお岩城海道の久慈川に橋が架けられたのは明治二十八年（一八九五）六月のこととされるが⁽²⁾、江戸時代から明治の道中記や紀行文を読むと、橋で渡っている時期もあった。昭和五年（一九三〇）にコンクリート製の永久橋が架けられるまでは、舟で渡ったり、木橋を渡ったりを繰り返していた。つまり架けられた橋がしばしば洪水で流され、その度に渡船利用に戻るののである。

久慈川の渡しをあがれば、久慈郡下土木内村である。川端にうどん・そば・惣菜ものをだす小さな茶屋があった。江戸詰め水戸藩士の妻浜岡たみが宝暦九年（一七五九）土用の暑さが残る七月八日、夜明けとともに水戸を発ち、久慈川を舟渡りで越え、この下土木内村で昼食をとっている⁽³⁾。水戸からおよそ十八キロメートル。女性の脚だとこの距離で昼食時間となるのであろう。

寛延期（一七四八・五〇）に記録された「岩城道中記」⁽⁴⁾は、この宿のはずれ

釈迦堂（のち神田）村との境に橋があると言う。寛政期（一七八九・一八〇一）の

「岩城浜街道中記」⁽⁵⁾には、釈迦堂村に入る前に「舟渡し有にや、雨天泥路等の節ならでハ常ハ不立」という。十八世紀後半に橋が失われ、雨天で泥道になったときにだけ船渡しになっていたのである。この附近に久下沼・沼・谷地という字名が残っている。大雨になれば水があふれだす区間だったことがわかる。

釈迦堂村は天保十三年（一八四二）神田村と改称させられる。

この村には往還に沿って宿はなく、民家が少しあるだけで、次の田中内（田中中）村の宿までの左右は水田と松並木が続いた⁽⁴⁾。

史料 明和九年（一七七二） 小田切伝兵衛「水戸岩城道中覚」（古文書学習会編

『道中記にみる江戸時代の日立地方』による）

△石上（久慈）川 舟渡し宿入口 川はたに小茶屋あり、三軒有

（この記録は、相馬藩士が江戸へ向ったときのもの）

宿駅田中内・大橋村 文化四年（一八〇七）の「水府志料」⁽⁶⁾に「寛文二末

（一六六二）二月より、大橋村と代りに半月づゝ人馬を次ぐ」とある。明和九年（一七七二）「水戸岩城道中覚」⁽⁷⁾には「上十五日大橋、下十五日田中内にて馬次」とある。となりの大橋村と分担して宿継ぎを行う。宿末の東側に郷士大内家がある。屋敷は回り惣堀で北に二重の堀があるという⁽⁶⁾。徳川光圀が西山で隠居生活に入ってからしばしば大内家に立寄っていることで知られる。

この村の名称は、寛永期は「田中内」、元禄期には「田中中」、文化期には「田中々」と表記される。『新編常陸国誌』⁽⁸⁾では「たなかうち」と読みが表記され、地元では「タナコーチ」と言っている。

大橋の一里塚 『日立みなみ風土記』⁽⁹⁾は、田中内の集落の北のはずれ、茂

宮川をわたる手前に一里塚があったという。それを裏付ける絵図がある。下（釈迦堂村方面）からやってきた街道が左（太田方面）からやってくる道に押されるようにして右に曲がっていくその付け根に、樹木のようなものが二つ描かれてい

る。絵図の作者が一里塚と認識していたのかわからないが、一里塚とみてよい。しかも街道の両側にある。日立市域の一里塚で道中の両側に塚が確認できるのはここだけである。

田中内村の一里塚の先に川がある。大橋村との境を流れる茂宮川である。かつて大橋川ともいった⁽⁶⁾。川はしばしばあふれることがあるのだろう、享保十五年(一七三〇)の「岩城便宜」⁽¹⁰⁾に「鮎の魚有、大雨の節ハ水出て陸へ上ル」とある。茂宮川で鮎が獲れるとは珍しいことである。なぜなら鮎は清流である里川に棲む。おそらく大雨のおり里川があふれ、鮎は茂宮川に流れ込むのだろう。そして水がひくと水田のあちこちに鮎が見られるということか。

【図1 田中内村の一里塚 別掲】

宿駅大橋村 問屋は茅根家である⁽⁹⁾。この宿の弘化期(一八四四・四八)における助郷村は小目・岡田・小沢・三才・内田・真弓・亀作・高貫・西宮・幡村の十ヶ村であった⁽¹¹⁾。以下各宿駅の助郷村名は弘化期の書上による。大橋宿では餅、うどん、そば切りが名物である⁽¹⁰⁾。

興谷寺と鎮守鹿島明神 大橋村の海道に曹洞宗興谷寺への参道入口があった。元々那珂郡石神内宿村(東海村)曹洞宗長松院の末寺天満山正法院があった(永正三年松室が開山したと伝えられる)が、元禄十三年(一七〇〇)に久慈郡大里村(常陸太田市)の曹洞宗月照山興谷寺を引き、沢山村の広沢山耕山寺(常陸太田市瑞竜町)の末寺となる。天保十四年(一八四三)には無住となっていたが、明治十年ごろまで存続した。現在は大橋共同墓地となっている。

田中内村には真言宗で石神外宿村泉福寺門徒の文殊院があったが、元禄期の水戸藩寺社整理によって僧侶が還俗させられ廃寺となった。このため寺を失った田中内村の人々は興谷寺の檀家となった。

大橋村の鎮守である鹿島明神もまた海道に参道入口をもっていた。開基時期についてはわからない。神体は鏡、社領七石余あり、享保十一年(一七二六)になつて鹿島神宮に改められた⁽¹²⁾。

十八道坂と石名坂 標高五メートルほどの大橋宿を過ぎると、まもなく大きな坂の入口がある。ここからは石名坂村となる。江戸時代の地誌・紀行文・道中日記は例外なくこの坂に関心を示している。

「水府志料」⁽⁶⁾は石名坂村の条で「十八道坂」の項目を立てて「坂長九十六間。古來石那坂と書す。水戸義公(徳川光圀)命じて、十八道の字用ひらる。按ずるに、森山より磯原迄、片浜通十八ヶ村への往還、此坂の外に道ある事なし。故に名付られし歟。此坂より北にある村々、これを坂上郷と稱す」と述べている。按ずるにと書いたのは「水府志料」の著者小宮山楓軒である。

楓軒の説はそれとして、花園神社の縁起「華園山縁起」は、花園山満願寺の修験が石名坂ではじめて十八道の修行をしたので、十八道と書いてイシナザカと読むことにした、と古老が伝えており、今は人々が迷うので石名坂と書く、と述べている。なお十八道は密教系寺院(天台や真言)の修行法の一つで、石名坂にはかつて天台宗の地藏院があったことから「華園山縁起」の伝承には、それなりの歴史的事実が反映されているとされる⁽¹³⁾。

石名坂からの眺望 「岩城道中記」⁽⁴⁾には「宿入口大坂有り石名坂といふ、此坂上より筑波、岩間、笠間辺、水戸の方能みゆる」、「岩城浜街道中記」⁽⁵⁾は「入口に坂有、石名坂といふ、西南の方富士山みゆる」と記す。二本松藩の城代をつとめた成田鶴斎は文政六年(一八二三)「南轡紀游」⁽¹⁴⁾で次のように石名坂を登りきった地点のすぐれた眺望を描いている。

石那坂ト云ル坂ヲ登レハ(中略)松林ノ間ヨリ南海久慈浜眼下ニアリ、龍鱗ヲナセル老松村々ト並植テ、其前ニ久慈川流レ入、白沙冽瀉ヲナシ、沖ノ方ハ藍青ヲ疊ミ、岸ウツ波ハ白雪ヲ散ス、蒼海ヲ目撃セサル事卅余年ノ久キ今ニシテ是ヲミレハ、旧相識ニ遇ヘルカ如ク、又新知己ヲ得ルカ如ク覺ヌ、停観スル事多、時起テ行事ヲ忘ル

これは江戸時代だけのことではない。大正年間この地を旅した田山花袋も「石無坂から常陸の海浜を望んだ眺望はこの沿線中忘れても見なければならぬもの

である。これほど長い汀線に波に白く碎けてゐるさまを見るやうなところは、日本にもさう澤山はあるまいと思ふ」と称賛している⁽¹⁵⁾。

以上は、江戸あるいは水戸から岩城海道を下つてきて、石名坂村の大きな坂をのぼりきり、振り返つて見た風景である。これから向かおうとする地を「水府志料」の著者である小宮山楓軒は「浴陸奥温泉記」⁽¹⁶⁾で「石那坂上ルコト四百六十歩、コレヨリ山ニ入ル。西ニ山アリ、東ハ大海眼下ニ見ユ」と記している。江戸あるいは水戸からの平坦な地を歩いてきた人々に石名坂は「山に入る」という感慨をもたらすのであろう。

地藏院跡と融通念仏供養塔 石名坂村北野神社入口にある地藏院跡に正徳三年(一七二三)の融通念仏供養塔がある。銘文は「(梵字) 奉仕養融通大念仏/願以功德普及於一切我等與衆生皆共成佛造/若人散乱心入於塔廟中一稱南無佛皆已成佛道/時正徳三癸巳年初冬 結衆 舜興」。この塔は、北野天神の別当地蔵院の跡地にあること、地藏院は白羽大聖院末で、大聖院は黒子千妙寺末であること、そして舜興は黒子千妙寺から入山した僧であることから、天台宗東睿山千妙寺(筑西市黒子)の再建勸化によつて造立されたものであるという。茨城県内では二例目の融通念仏供養塔である⁽¹³⁾。

北野神社・羽黒権現跡 石名坂村鎮守北野天神宮もまた入口を岩城海道にもつ。天正四年(一五七六)四月開基。徳川光圀が御立山の山頂を社地に寄付して、元禄十一年(一六九八)八月二十五日現在地に移転した⁽⁹⁾。

石名坂村の鎮守羽黒権現社は、開山経緯不明。祭礼は四月十七日と九月十九日の二度行われていたが、元禄七年(一六九四)に潰れとなる。社領は隣り久慈村の大甕明神のものとなり、祭祀を執行していた内蔵之助も大甕明神の禰宜となり、跡地は御立山(藩有林)となつた(「鎮守開基帳」)。すなわち久慈村の鎮守大甕明神は石名坂村の鎮守ともなつたのである。

金砂大祭礼と石名坂の榎 東西の両金砂神社の神体が水木に浜降りする金砂大祭礼が七十二年に一度行われる。近年では二〇〇三年に行われた。この浜降り行

列の最後の休み場として石名坂の宿が設けられている。行列の神輿は、大橋から長い坂をのぼり、宿の中ほどにある榎の切り株の上に安置される。この場所は榎元と呼ばれている。この榎の切り株は祭りが終わると掘り返され、同じ場所に七十二年後の大祭礼を迎えるためにあらたに植樹される。昭和六年(一九三二)の大祭礼の時には、伐採した榎で石名坂の人々は縁起物としてしゃもじや茶うけ、麵棒などをつくり、休み場や水木の浜で販売したという⁽⁹⁾。

註

- (1) 『日立市史』 日立市史編さん会編 一九五九年
- (2) 『村の歴史と群像』 東海村史編纂委員会編 一九九一年
- (3) 「松島旅行日記」 浜岡たみ 宝暦九年 (古文書学習会編『道中記にみる江戸時代の日立地方』による。以下『道中記』と略)
- (4) 「岩城道中記」 著者不詳 寛延年間 (『道中記』による)
- (5) 「岩城浜街道中記」 著者不詳 寛政年間 (『道中記』による)
- (6) 水府志料 小宮山楓軒著 文化四年 (『茨城県史料 近世地誌編』一九六八年所収)
- (7) 「水戸岩城道中覚」 小田切伝兵衛 明和九年 (『道中記』による)
- (8) 『新編常陸国誌』 上巻明治三十二年・下巻三十四年刊 中山信名修・栗田寛補 本稿では一九八一年の宮崎報恩会版によつた。
- (9) 『日立みなみ風土記』 日立みなみ歴史民俗研究会編 二〇〇二年
- (10) 「岩城便宜」 川上樸齋 享保十五年 (『道中記』による)
- (11) 日立市史編さん委員会『新修日立市史』上巻 一九九四年
- (12) 「御領内鎮守神名附」 編著者不詳 宝永期 日立市郷土博物館蔵
- (13) 榎本実「融通大念仏供養塔について」『ひたちの野仏』第四集 一九八七年
- (14) 「南轅紀游」 成田鶴齋 文政六年 (『道中記』による)
- (15) 『山水小記』 田山花袋 一九一七年刊
- (16) 「浴陸奥温泉記」 宮山楓軒 文政十年 小(『道中記』による)

2 森山・大沼宿

大甕明神 大甕明神は久慈村の鎮守であるが、多くの道中日記が大甕明神を石名坂村に属するかのようになっている。その理由ははじめは石名坂村にあったものが、元禄八年（一六九五）に宿魂石（雷断石とも）の上に移されたという社伝が広く流布していたことと、村名と大甕明神が祀られている異形の石が表象するものが一致するからであろう。たとえば「岩城便宜」⁽¹⁰⁾が「此（石名坂村地藏院）先左の方石名坂明神有、此社石山也、是を雷断石と云、誠に鬼石を従たる有様也、景色よし、額に大御加大明神と有」と記録するように。

小宮山楓軒「浴陸奥温泉記」⁽¹⁶⁾の次の記述は、江戸時代の大甕明神の信仰のありさまを具体的に語っている。

祠官茅根織部助ガ家ヲ訪ヒ、主人迎接（中略）曰、コノ神久慈村ノ鎮守ユヘ漁船信心祈誓オコタラズ、魚ヲ獲レバ初得ノ物ヲ必ず進ム、故ニ神前齋物常ニ多ク、鯉漁ノ時ハ社頭ニ畳累スルホドノコトナリ。又相馬侯信仰アリ、其江戸上下ノ時必参拝シタマフナリ。

境内の樹叢（常緑広葉樹林）は昭和三十年代の国道六号付替・拡幅工事によって一部失われて分断されてしまったが、市指定文化財となっている。

泉川道標 大甕神社の拝殿前の道端にある。銘文は「従是 泉川道ノ此地ミカノ原水木村へ十二町ノ常陸廿八社之内天速玉姫神社」。建立者は奥州岩瀬郡須賀川泉屋忠兵衛、建立時期は明和八年（一七七二）四月。高さ九十センチメートルあり、町屋石が使われている。市指定文化財である。

建立者の泉屋忠兵衛は伊藤祐倫といい、須賀川で薬種問屋を営む。伊藤は明和三年に牡丹の苗木の栽培を始めた。のちに須賀川牡丹園として知られるようになる。なお伊藤が道標を建てた経緯は不詳⁽¹⁷⁾。

ここで言う「泉川」は川の名称ではなく、湧水地をさしていることが、伊能忠敬の安永七年（一七七八）「奥州紀行」⁽¹⁸⁾にある「泉川ハ二三間四方ノ神水にて、見る人湧たり湧いたりと叫候へハ、中程より神水湧上るなり」からも知られる。この泉は単なる湧水ではなく伊能忠敬が右に言うように、また「松島旅行日記」⁽³⁾にある「寄りて声をかけ、手を鳴らすにお沸き返る。御国柄とや不思議なる事を見侍る」ゆえに道標が建てられるほどの名所となっていたのである。道標から泉まで約一・二キロメートル、この泉のかたわらにある常陸廿八社之内天速玉姫神社とは泉明神のことである。

【図2 泉川道標 別掲】

宿駅森山村 森山村では北隣りの大沼村と分担して宿継ぎを行った。「水府志料」⁽⁶⁾では「寛延二巳（二七四九）より森山村と半月づゝ代り次ぐ」。

だが享保十五年（一七三〇）の記録である「岩城便宜」⁽¹⁰⁾では「上五日ハ大沼下五日ハ森山馬次也」とか、明和九年（一七七二）「水戸岩城道中覚」⁽⁷⁾では「此所（大沼）森山と四五日ツ、代ルく馬次也」とある。宿継ぎの分担日程はときに変わるものであることがわかるが、その要因についてはおそらく村の負担軽減の方向でなされたと思われるが、たしかにはわからない。

森山村の助郷に指定されたのは、水木・南高野・久慈・石名坂・茂宮・留・大森の七ヶ村である。

日輪寺 森山村字宿西の岩城海道沿いにある。真言宗で来迎山宝寿院と号す。開基は応永三年（一三九六）と伝える。友部村法鷲院の門徒寺であった。もと河原子村にあったが、元禄二年（一六八九）森山村の末寺である真福寺を廃し移転した。寺領十五余石。元治元年（一八六四）九月十八日天狗諸生の争いで山門を除いて焼失した。その後無住の状態が続いていたが、昭和十五年（一九四〇）本堂を新築し、再興がなされた。

吉田明神 宿末にある吉田明神は元禄八年（一六九五）九月に水戸藩の寺社改革の八幡潰しによって八幡社から改められた。八幡社の創建は延暦十四年（七九

五)と伝える。吉田神社には中世・近世の棟札が二十七点残されている。応永二十年(一四二三)のものが最も古く、中世のものだけでも四点ある。慶長十七年(一六二二)の棟札には、森山の宿が佐竹義重(一五四七―一六一二)の代にたちはじまったことが記されている。これら棟札は市指定文化財。銘文は『日立史苑』第八号(19)に翻刻されている。

一里塚跡と松並木 写真は国道六号を北に向かって撮っている。塚は国道の東側に一つだけ、片塚だったことがわかる。松並木が北に向かって続く。一里塚は撮影の翌年から始まった国道六号の拡幅工事によって削られ、消滅した。現在その跡に日立市教育委員会によって碑が建てられている。

弘化四年(一八四七)に水戸藩から大沼・金沢・大久保村に街道整備に関する達が出された。「その村々往還掃除近頃無之故、宿内草立候村方も相見、又々並木生茂り、甚だ見苦敷のみならず、他所家中通行槍かゝり等にも相成、不相濟候条、当時の間見早々取初立候様可被致候」(1)。近頃岩城街道の掃除がなされず、宿内に草がのびている村も見られる。また並木も生茂って見苦しいだけでなく、武士の通行のおり槍の邪魔になるので、早急に掃除を行うことという指示だった。通行量が増えればその分伝馬役が増える。街道の整備に手が回らないのはこの三ヶ村だけではなかったろう。

【図3 森山の一里塚 別掲】

幕末期における大沼宿の間屋は小泉家であった。小泉家には数多くの「先触」が残されている。

(17) 水庭久尚「泉川道標の建立者について」『郷土ひたち』第三二号 一九八〇年

(18) 「奥州紀行」 伊能忠敬 安永七年 《道中記》による

堀辺武「道中記にみる日立地方の道標」『茨城の民俗』第三八号 一九九九年

(19) 日立市史編さん委員会編『日立史苑』第八号 一九九五年

3 下孫宿

金沢村杉ノ宿 大沼村を過ぎ金沢村に入る。この村は戸数百五十二の村で、集落の中心は山の麓にあり、街道筋とその東に農家が散在する。享保十五年「岩城便宜」(10)に「金沢新田 民家少し有、すぎの宿と云」の記載がある。

元和九年(一六三三)にとりなり大久保村鹿島明神で遷宮、神殿造営がなされた。これにあてる経費をまかなうための勧進が行われ、大久保村の檀那(主催者)のほか、周辺の河原子・下孫・諏訪・油繩子村とならんで「杉ノ宿村」も勧進奉加の檀那に加わっていた。親村金沢村に含まれつつも、宿として自立性を古くからもっていたことの現れである。なお現在は杉ノ宿という地名はなく、杉西・杉東・杉内として残っている。

大久保村 真弓山・太田への道 杉の宿をでて岩城海道からそれて西の山のふもとにある大久保村の中心集落にはいり、山あいをさらに西へ進むと道標を兼ねた高さ一〇五センチメートルの馬頭観音像がある。剥落があり、建立年・建立者とも不明だが、像に「右真弓山／左大田道」の文字が刻まれている。現在この道標が立つ場所から左に進むと真弓神社にでる。道標は多少動いているかもしれないが、大久保村から山を越えて真弓・太田に出る道があつて、真弓神社への参拝や在郷町で六斎市の立つ太田への物資運搬などに利用されたのであろう。

下孫宿 大久保村と河原子村の境をはしる岩城海道を北に進む。「岩城便宜」(10)の大久保新田の条に下孫の宿に入る手前「右の方ノ海道際ニ塚有、是は慶長頃相馬殿秘蔵の月毛の馬、此所ニて矢に□□死たるを埋し印の塚のよし、今ニ相馬殿此所通りの節ハ、駕籠をとゝむ」と伝えている。この塚は現在見あたらないが、相馬氏の愛馬の石塔と伝えられる「相馬碑」は宿末にある(「相馬碑」の項を参照)。

村高三九七石（「元禄郷帳」）の下孫村は、一五四一石の大久保村と古くから漁村で八九七石の河原子村の二つの村に挟まれた小さな村である。その大久保村に孫（上孫）という字が下孫村の西側に接してある。また下孫村の下宿に接して東側に古屋敷という字がしもの川（桜川）の右岸にある。この街道筋に宿駅が必要とされ、古屋敷から街道筋に下孫の集落が移転し、村として独立したことが想定される。

下孫宿の助郷に指定されたのは、油繩子・諏訪・大久保・河原子・金沢の五ヶ村である。

牧野備後守の宿札 安政二年（一八五五）に笠間藩主牧野備後守一行が飛地のある岩城領へ向かった。行きの三月二十一日と帰りの四月八日に下孫宿に宿泊した。それを示す二枚の宿札が下孫宿の長山琢郎家に残されている。表は二枚とも「牧野備後守泊」と杉板に墨書されているが、一枚の裏に宿泊のいきさつが墨書されている。本陣の長山家の筆と考えられるこの墨書には「笠間侯岩城御領分神谷御下り候間、安政二卯三月廿一日夜、当家御本陣御供方上下百九十五人之内御本陣附上下廿九人御泊り、金五百疋被下置、外二御供方旅籠料相渡り申候、四月八日夜御帰路御泊り、宿札式枚相渡り右同断」と書かれている（20）。

相馬碑 永禄五年（一五六二）に佐竹氏と陸奥国の相馬氏が孫沢この地において戦ったことがあると言われ、相馬碑はそのとき戦死した相馬氏の兵士の供養碑と伝えられてきた。そして昭和五十一年（一九七六）日立市の指定文化財となった。しかし近年この説に疑問がもたれるようになった。たしかにこの時期あいだには岩城氏がおり、相馬氏と佐竹氏が直接戦闘をまじえる政治状況は考えられない。

碑面には金剛界五仏種子が彫られており、古い時期の石塔によく見られるが、梵字の彫りが浅く、碑の大きさに比べれば梵字は小さく、これらから「中世も末近い時期の板碑」であるとされる（21）。

碑はこれまでに三回移転している。元々の場所はわからなくなってしまった。二回目の移転先は、諏訪の一里塚の前である。碑が移転してまもなく、一里塚は削られて工場になってしまい、環境もよくなかるとして、現在地に移された。

なおこの板碑については、江戸時代に入ってから伝承が次のように記録されている。ひとつは「水府志料」〔6〕である。下孫の条に「古石碑 往還道の東宿のしに在。梵字のみにて、何人の碑なるを知らず。古昔相馬殿の名馬斃れしを、埋し所なりとも申伝ふ」とある。二つには明和九年（一七七二）十月相馬中村藩の小田切伝兵衛が中村を発ち江戸に向かう道中の記録である〔7〕。油繩子からやってきて「孫ノ宿入口入り手前ニ高德院様の御馬、鹿野と云馬の石塔有、ほろおんかんまんの梵文有、ミへかたし、所ノものしめをはへて置也、左ノ方海道ノわき畑の際ニ有」とある。ここに記録されているのは「相馬碑」のことである。二つの道中日記が示す碑の立つ場所は下孫宿の北のはずれの道中の東側である。

この相馬碑の性格については、瀬谷義彦「相馬碑考証」〔22〕が検討を加えている。

【図4】相馬碑 別掲

諏訪村一里塚 現存しないが、天保十五年（一八四四）の「諏訪村反別絵図」に描かれている。一本の松が植えられた塚があるのは字城之内。城之内の南東のはずれの荒地にある。塚の下の赤く太い線は往還（岩城海道）。塚の南側を川が流れている。これはしもの川（桜川）で、川の向うは下孫村である。諏訪の一里塚は下孫宿をすぎ橋をわたり、すぐ左手にあったことになる。昭和三十五年（一九六〇）の相馬碑一回目の移転は一里塚の前だった。その後一里塚は工場建設のため消滅した。

この塚がある岩城海道をはさんだ反対側は諏訪村字向原で、絵図に塚は描かれていない。この諏訪村にある一里塚も片塚と考えられる。

【図5】村絵図に描かれた諏訪の一里塚

西行法師歌碑 高さ一・七二メートルある西行の歌碑の歌の傍らに「水あなみち」と彫つてある。現在日立市多賀市民プラザの前庭に建っているが、この歌碑は何度か移転の憂き目に遭つている。元来の位置はどこか。寛政年間の「岩城浜街道中記」(5)に次のような記事がある。

此駅(下孫宿)を出てゆなは箇(油繩子)の間に風穴、水穴と言あり、其分レ道に石を建て和歌一首を刻めり、其歌 おほくほ(国分と書り)の田面の蛙名のみしてねさめせよとて鳴声そうき 土俗いふ、昔西行法師此所にとまりて蛙の声を聞きてよめる云伝へたり

下孫の宿を出てすぐに「しもの川」(桜川)を渡ると諏訪村で、八百メートルほど進んで、油繩子村に入る。この間で諏訪村の中心集落に向かう別れ道が建立位置である。しかし戦前から戦後にかけてこの町に都市計画が実施され、街路が規則的に配置されたので、古い道を見いだすことはできなかった。

諏訪の水穴 西行の歌碑に刻まれた「水あな」とは諏訪川(鮎川)の上流にある鍾乳洞のことである。諏訪村の諏訪明神下社の先を諏訪川にそつて二・五キロメートルほど上流に進むと川の崖面にある。「岩城道中記」(4)が「甚妙なる穴也、見物すへし」として詳しく解説しているが、そのなかに水穴をめぐる伝説を諏訪信仰と関連づけて記録している。「往古万年もりこ、万年大夫といふ夫婦信州諏訪より来て此所に久しく住、上諏訪下諏訪より両宮をくわん請して、その身の像を式つ作り、件の社壇へ納め置、二人共に穴へ入て帰らずといひ伝ふ」。

入四間・太田への道 岩城海道から西へ六百五十メートルほどの諏訪町一丁目内の高圧線鉄塔下を集められた石仏の中に道標を兼ねた嘉永七年(二八五四)建立の「馬頭尊」があり、「北水穴・入四けん/東すけかハ/南太田」と刻まれている。水穴とは道中日記にしばしば記載されている諏訪村内の鍾乳洞のことである。滝平新田の南側を流れる諏訪川(鮎川)に面してある。江戸時代においても名所となつてきた。この水穴の手前を北に折れると、北の沢という集落がある。その先を進むと高鈴山、その山かげに御岩山権現があり、久慈郡入四間村であ

る。

油繩子村普濟寺跡 諏訪村地内をぬけて油繩子村に入る。

宿並の中ほどに東に向う参道がある。その先には真言宗の普濟寺があつた。山号は海岳山、院号は一心院。醍醐無量寿院(山城国)の末寺である。応永十九年(一四二二)に大久保村に始まり、慶長年間に河原子村に移る。末寺五ヶ寺、門徒寺二十三ヶ寺をかかえる有力寺院であつた。大久保鹿島神社に残る江戸時代の棟札二十枚の中に、慶長九年(一六〇四)から万治四年(一六六一)の九枚に遷宮導師として普濟寺の名が書き上げられていることからうかがえる。

慶長十四年に大窪(のち大久保)村と助川村の金山を巡つて境界争いが起きた。そのときの鉄火起請文(火起請)によれば、幕府代官の伊奈忠次が鉄火をもつて決めよとの指示に反し、両村は普濟寺と宮田村にある曹洞宗大雄院を仲裁に立てることで内済した(6)。普濟寺はその後河原子村に移るが、この地域における政治的な力を知ることができる。

水戸藩の元祿の寺社改革により河原子村から油繩子村八幡社跡地に移る。このとき末寺・門徒寺二十四社を還俗・破却などにより失う。なお油繩子には真言宗で永正二年(一五〇五)開基と伝えられる友部村法鷲院末の東福寺(無量山慈眼院)があつたが、普濟寺とひきかえに河原子村へ移る(23)。

その後天保期の水戸藩の寺院整理により普濟寺の僧侶は還俗させられ、廢寺となる。以後油繩子村に寺院が開かれることはなかった(11)。

油繩子若宮八幡 普濟寺に隣りあつた若宮八幡は元祿八年(二六九五)十月に水戸藩によつて潰される。氏子たちは隣村の諏訪村諏訪明神の氏子となるよう命じられ、跡地は諏訪明神の神職高野撰津へ預けられた(12)。しかしいつしか八幡社は再興されていた(24)。

油繩子から里川流域への山道 藤田東湖と交流があつた学者の安井息軒が天保十三年(一八四二)に仙台・松島へ旅行した。帰路を岩城海道にとつた。そのときの日記「読書余適」(25)には、助川・成沢をすぎて「油繩子に至る。捷を瑞

龍山に取る」(原漢文)とある。瑞龍山への近道とは、油繩子から諏訪の水穴を過ぎて、滝平新田から茅根村(常陸太田市)へ出る道であろう。

また「岩城道中記」(4)は「此(油繩子)宿通り過、土橋有、下は諏訪川といふ、諏訪の水穴より流来る也、此はしの前左の方ニ諏訪村水穴へ行道有り(中略)奥に滝平新田といふ所有り(中略)此細通り町屋辺えもぬけ候由」と記す。滝平新田から町屋村へ抜ける狭い道があることを記している。

油繩子から水穴、滝平新田、そして瑞竜へぬけるこの山道は、宿外れの諏訪川を渡る手前から入ることもできた。

この滝平新田の入口に道標がある。享和元年(一八〇二)に建立された地藏菩薩像に「右町屋村道ノ左妙見山道」と彫られている。妙見山は常福寺村(常陸太田市)にあつて山伏南窓院が祭祀する森合妙見寺のことであろう。

大久保・諏訪・油繩子・成沢の岩城海道沿いの村から山を越えて、久慈郡の里川流域の村々にでる細道がいくつもあつたことが知られる。

(20) 榎本実「岩城相馬街道下孫宿・長山家の宿札など」『郷土ひたち』第五九号 二〇〇九年

(21) 千々和到「日立の板碑を考える」『ひたちの野仏』第五集 一九八八年

(22) 瀬谷義彦「相馬碑考証」『郷土ひたち』第四四号 一九九四年

(23) 「開基帳」

榎本実「普濟寺と小野天神」『郷土ひたち』第四七号 一九九七年

(24) 天保十三年九月「油繩子村田畑反別絵図」 日立市郷土博物館蔵

(25) 「読書余適」 安井息軒 天保十三年 『道中記』による。

4 助川宿

成沢村宝塔寺 諏訪川(鮎川)の土橋を渡り、急坂を登ると、岩城海道に面して日蓮宗宝塔寺の山門がある。宝塔寺ははじめ大高山妙法寺と称し、赤浜村(高

萩市)にあつた。開基は日弁で、嘉元元年(一三〇三)に建立と伝えられる。元禄九年(一六九六)に徳川光圀の命によりこの成沢の地に移され、山号はそのままに寺号を変えた。それまで成沢村にあつた真言宗の三寺院は寺社改革によりすべて廃寺となつた。その後宝塔寺は天保十四年(一八四三)水戸藩の寺院整理により追院処分を受け廃寺となつたが、徳川斉昭失脚後の弘化三年(一八四六)に再建される。その後明治四年(一八七二)再び廃寺となり、昭和二十七年(一九五二)再建される。

宝塔寺には、徳川光圀寄進と伝えられる「木造釈迦如来・多宝如来竝坐像」がある。日蓮宗特有の妙法蓮華経法の本尊である。中央の宝塔にはひげ文字で南無妙法蓮華経の題目が記される。江戸時代の作とされる。朱漆塗の春日厨子に納められている。市指定文化財である。

高鈴道 宝塔寺の山門をすぎ、檜入沢の手前に道標「従是 高鈴道」があつた。現在は国道六号交差点改良工事により北方百メートルの空地に移転している。年号や建立者は刻まれていない。高鈴山への道といいながら、それはその先にある入四間村にある御岩権現への参詣の道であつた。

【図6 高鈴道標 別掲】

安政二年(一八五五)九月、水戸藩儒青山延寿が先祖の墓参りがてら景勝地巡りに出た(26)。ときおり山越えの道をたどる。日立市域での行程を示そう。

(一) 真弓権現―金沢村飯盛山金坑―大沼村

(二) 成沢村―助川村金山―小屋沢―高鈴山頂―入四間村―高原村―友部村

真弓山に登る時と高鈴山に登る時に延寿には村人の案内があつた。成沢村から高鈴山にのぼる道はいくつかある。延寿がたどつたのは檜入沢にある道標からではなく、助川村との境あたりから入四間村に向かつた。成沢鹿島明神の瀬谷神官の案内をもらい成沢村を出た延寿は「右手、木の間から物見やぐらが姿を見せた。介川の砦だ。家老の山野辺氏が治めている。左手には切り立った山の崖が見える。これが砥山で、三十年前に初めて砥石が取れた」と山中からの風景を記した。高

鈴山頂で案内者と別れた延寿は入四間に下る道で迷ってしまった。これら山越えの道は案内人がつかないとたどれない、言いかえれば人が歩くだけの狭い山道であったことを示しているようか。

高鈴道道標をすぎてゆるやかな坂道を上っていくと松並木の間から右手東側に会瀬の浜が見える(10)。このあたりの海道の標高は六十メートルを超える。これは七十メートル余の勿来関につぐ高さであり、石名坂村と並ぶ地点である。

成沢村の坂をのぼりきると助川村との境である。ここからは長い下り坂になる。この字を田手沼といい、昭和三十六年(一九六一)の国道拡幅工事までは松並木が続いた。

【図7 田手沼の松並木 別掲】

助川海防城 助川海防城は助川宿に入る手前の西側の山中に築かれ、道中からよく見え、大手門が岩城海道に面して建てられた(現在の市立助川小学校正門)。

助川海防城は水戸藩主徳川斉昭が天保年間領内海岸で外国船の襲来に備えて古城跡に築いた館で、海防惣司に任じられた家老山野辺義観が周辺の村に一万石の領地を与えられ居城した。

天保七年(一八三六)から築城が始まり二年後に完成。第二期工事が天保十二年からはじまる。上野国那波郡連取村(伊勢崎市)の庄屋を務めた森村新蔵が「北国見聞記」(27)で第二期工事中の館の様子を次のように描いている。

此処ハ水戸家の臣山部(山野辺)主水拝領の地にして高一万石の新城ヲ築く。天保十二辛丑年二月城普請始り、同六月中旬にハ御本丸向出来、当時二ノ丸向普請最中也。此城、山に寄て塀櫓等一曲輪一曲輪に相見へ誠に見事也。又大手ハ助川の上ノ畑中に枅形あり。大手の枅形より本丸の門迄凡ソ二十丁程。此助川駅ハ双方出入りの道筋、岩山を鑿り切り道と成シ、要害堅固の地也

この館は元治元年(一八六四)水戸藩の内部抗争である天狗諸生の争いにまきこまれて焼失する。本丸と二の丸の一部が県と市の指定文化財となっている。

おこの館の当時の公式名称はなく、「助川海防城」という名称は指定のおり新たに考えだされたものである。

助川村一里塚 助川村上宿の手前、助川海防城の大手の近く、現在の県立日立第二高等学校の敷地内(岩城海道の東側)にあったという話が伝わっている。ここも片塚であった可能性が高い。

鹿島明神と大聖寺 道を下ると助川村上宿である。海道の東に面して鹿島明神がある。社伝によれば、鹿島明神は大同四年(八〇九)に鹿島神宮の分霊を祀ったことに始まるという。元禄八年(一六九五)十月に司祭者が真言宗普濟寺の門徒だった正善院から諏訪明神の高野撰津に替えられた(「開基帳」)。例祭に佐々羅が奉納される。これは「日立ささら」七地区の一つとして県の文化財に指定されている。

鹿島明神の祭礼時に奉納される風流物と呼ばれた四町内の舞屋台があった(11)。昭和二十年の空襲で三台が焼失し、残った西上町の屋台が「旧助川西上町舞屋台」として市指定文化財となっている。現在は助川鹿島神社境内にある収蔵庫に収められている。

鹿島明神から三百五十メートルほど進み、中宿の西側に真言宗の大聖寺がある。友部村法鷲院末寺の大聖寺(明王山不動院)は、文明三年(二七四二)の開基と伝えられる。天保年間に廃寺となったと伝えられるが、はっきりしない。昭和初年に法鷲院の別院が設置されるが、昭和二十年の空襲で焼失した(28)。

助川宿駅と宿並 多くの道中日記で助川宿の評価は高い。「岩城道中記」(4)は「介川宿五丁程、能宿也」と言う。伊能忠敬も「奥州紀行」(18)で「介川ハ浜通りニテハ大概宜宿ニ候」と記している。宿の大きさも岩城海道のなかでは三本指に入る。また不定期ながらも市場がたつこともあった。文化年間(一八〇四―一八)に成立した坂場流謙「国用秘録」(29)に「水戸領大田村、部垂村、石塚村、馬頭村市場也、此外ニ安良川・大中・介川・湊・太子市ありといへ共月六度ニ定たる事もなし」とある。岩城道中では助川と安良川の二ヶ所で、この二つの村は

在郷町に近い働きをした時期もある。

この宿の本陣は下宿の長山家である。長山家は代々半兵衛を名乗り、享保元年（一七一六）から水戸藩郷士を勤めた。初代の郷士半兵衛の母が徳川光圀の乳母であったことから光圀はたびたび長山家を訪れたという⁽³⁰⁾。脇本陣をつとめる中宿の長山家は問屋でもあった⁽¹⁾。助川の問屋は上宿・中宿・下宿にそれぞれあり、中宿の長山家がとりまとめをしていたという⁽³¹⁾。

【図8 本陣長山家 別掲】

この駅の助郷村となったのは宮田・会瀬・成沢の三ヶ村である⁽¹¹⁾。

史料 享保十五年 岩城便宜 川上樸齋

能き宿也、宿中右の方ニ長山半兵衛居宅有、宿入口右の方ニ鹿島明神の社有、左の方大聖寺真言宗、宿を過二三町行土橋有、左は大雄院の道也、又五町ほど過土橋あり、宮田江の入口也

史料 寛延年間 岩城道中記 著者不詳

介川宿前下り坂有り、介川宿五丁程能宿也、宿末東側郷士長山半兵衛居宅有り、御殿有り、宿を出はなれ左の方溜池有り、此先土橋（数沢川）有、橋向ハ宮田也、橋際より杉室大雄院へ行道有り

【図9 宮田村宿並図 別掲】

橋について 右図9には橋が二つ描かれている。一つは助川村と宮田村の境を溜池から流れでる数沢川にかかるもの、もう一つは宮田川にかかるもの。この絵図に限らず岩城海道にはあちこちで川や水路にかかる橋が描かれる。木橋のように描かれているものもあるが、大半は土橋でなかったのか。これまで道中記にみえてきたようにすべて橋は「土橋」と記されている。杭や桁、敷板はもちろん木製である。敷板を土で覆う土橋の方が耐久性が高かったからである。

四十八坂 文政十年（一八二七）五月十四日、水戸を出て鳴子温泉（宮城県）に湯治に向かった小宮山楓軒は、その日のうちに大甕明神、坂上陣屋（郡奉行所）を訪ねた。そして河原子浜を過ぎて雨にあい、海道筋の下孫宿で駕籠に乗り、助

川宿に到着する。緑屋平左衛門に宿泊。翌十五日「宿ヲ出デ、下り坂百餘歩、土橋アリ（中略）コレヨリ登降ノ坂多シ、荒川（安良川）に至ルマデ四十八坂アリト云フ」⁽¹⁶⁾。

たしかに坂が多い区間である。石名坂の坂を登りきれば、油繩子宿まで平坦な道なのである。しかし諏訪川（鮎川）を渡ると成沢と助川の宿入口の二つの急坂がまっついているはずである。楓軒は駕籠に乗っていて気付かなかったのか。

明治に入っても道路の状況は変わっていない。明治十四年（一八八一）茨城県会議長だった野口勝一が「成沢村に入る。石坂磊落行歩甚た艱む。是より迤北一村を經、一林に入る毎に、阪又阪、腕車（人力車）乗し過ぐ可らず、一乗一下繁忙厭ふへし、土俗言ふ石名坂より磐城に至る四十八坂ありと、或ハ然らん」⁽³²⁾と記している。四十八坂の起点と終点がそれぞれ異なるが、成沢から安良川までは坂の多い区間で、人々を悩ました。

助川村の宿を出ると左に「弁天さまの溜め」がある。数沢川の水が一旦沼に溜まり、また川となって流れ出る。そこに土橋がかかっている。現在は弁天の溜は埋め立てられ市役所が建ち、数沢川は都市計画により流路を変えられて地下に潜り宮田川に注いでいる。坂道を下り宮田川にかかる土橋を渡り、上り坂になる。その上が宮田の宿である。

宿 宿駅のある村でなくとも往還に沿った下土木内村から石滝村には厚薄はあれ家並が続く場所がある。それらを「岩城道中記」⁽⁴⁾は「宿」と記載している（多くの場合「宿」が字名である）。「岩城道中記」が「宿」の有無と宿の長さを克明に記録している（別掲表 25頁）ので、それから宿の規模が推定できる。最も大きいのは、宿駅ではない川尻村の六町（約六〇メートル）から七町であり、ついで宿駅である五町の助川村である。そのほかは大きな差は認められない。

宮田村の宿 宮田村の場合「坂より上宮田村の民家所々に間を切テ有り」と家はまばらであると言う。幕末となると状況は変わってくるのか、百人ほどの水戸藩役人たちが助川村と分担して宿舎を提供している。

文久三年（一八六三）七月水戸藩武田耕雲齋を筆頭に軍用掛、目付など水戸藩役人一行が領内の海防検分を行った。総勢百一人、馬八匹。そのおり宮田村では隣の助川村と分担して、それぞれ宿泊所十軒を用意した。この事例は宿駅となり村である宮田村宿が海道の宿泊所として補助的な機能を果たしていることがわかる⁽³³⁾。

稲荷明神と神峰権現 宮田の宿はずれの左に稲荷明神がある。小宮山楓軒は文政十年（一八二七）に「宮田村人家ヲ出レバ、稲荷ノ祠アリ、石礎アリテ高キ所ニ立セタマフ。四月十日神峰山権現コ、ニ降臨、ソレヨリ助川制札ノ所ニ休ミ、会瀬ノ浜ニ神遊、帰山アリト云フ」⁽¹⁶⁾と記録している。

明和九年（一七七二）、相馬藩士小田切伝兵衛は「（宮田村の神峰権現は）ミヤ田、助川、アフセ（会瀬）の鎮守なりとて海道脇ニ小石を積み重置所なり、此所ノ西ノ方遙ニ四五リ程先ニ権現の山有と云、右ノ権現ハ小石ヲ手向拝すト也、四月十日祭祀、アフセニテ潮コリ取給ウ」⁽⁷⁾と稲荷明神と神峰権現について記録している。

神峰権現の本殿は標高五九八メートルの神峰山頂にあり、宮田の宿はずれの稲荷の森に拝殿をもつ。神峰権現が宮田・助川・会瀬三ヶ村の鎮守となったのは、徳川光圀が命じたからだと伝えられている。現在は五月十日に祭礼が行われている。右二つの記録は、現在「日立風流物」とよばれる笠鉾上での人形芝居については触れていない。人形芝居は珍しくなかったのか、あるいはこの時期に行なわれていなかったのか。

(26) 「常北遊記」 青山延寿 安政二年。ここでは明治二年刊行の『常北遊記』をもとにした大森林造訳『常北遊記』（筑波書林）によった。

(27) 「北国見聞記」 森村新蔵 天保十二年 『道中記』による。

(28) 『日本歴史地名大系8 茨城県の地名』

(29) 「国用秘録」 坂場流謙 文化年間 茨城県史編さん近世史第1部会編『近世史料I 国用秘録上』（一九七一年）による。

(30) 鈴木彰「日立地方における徳川光圀の遊跡（一）」『郷土ひたち』第二八号 一九七七年

(31) 岡部一郎『助川村宿並』 二〇〇〇年

(32) 「多賀紀行」 明治十四年 野口勝一 明治十四年八月十九日付『茨城日日新聞』

(33) 文久三年「海防御見分宿割帳」 日立市郷土博物館蔵

5 田尻・小木津宿

六所明神 滑川村の字宿並にくだる手前の東側に海道に面して六所明神がある。開基は天正年間、友部山尾城の家臣らが陸奥国の塩釜神社を分霊したものと伝えられる太田命・塩土翁岐命・猿田彦命・興玉命・事勝命・国勝命を祭神とする⁽¹⁾。六所明神の司祭は元禄七年（二六九四）から同村の山伏千手院が行っていた⁽¹¹⁾。現在は塩竈神社。

度志観音・栄蔵小屋道標 滑川村の字宿並がとぎれたあたりの上り坂の途中に道標がある。高さ一・四メートルの自然石に「従是度志山観音道十一丁有／栄蔵小屋道二十一丁有」と刻まれている。建立年は刻まれていない。「岩城便宜」⁽¹⁰⁾に「坂をのぼり右の方、栄蔵小屋、度志観音の道と石標に切付有。此所より栄蔵小屋へ式拾壹町、度志山別当勸泉寺真言宗也。弘法大師正作之由、三間四面の堂也」とある。度志観音と栄蔵小屋ともに田尻村内である。

この道標のかたわらにもう一基、高さ七六センチメートルの「従是渡志くわんおん道」と自然石に刻まれた道標がある。建立時期は不明だが、建立者は宮田村の滑川久右衛門ほか二人である。

【図10 度志観音・栄蔵小屋道標】

度志観音の由来について「開基帳」が「当（田尻）村渡志正観音は弘仁年中（八一〇・八二四）四国讃岐之志渡観音同時代弘法大師御建立之由、宝治元年（一

二四七)に炎上仕、縁起焼失候、弘仁より当卯迄八百五拾年程」と記録している。別当真言宗勸泉寺は、友部村の法鷲院の末寺で清滝山源勝寿院の号をもつ。延徳三年(一四九二)開山と伝える。田尻村内には真言宗で法鷲院末の観音寺があったが、元禄期の水戸藩寺社改革で破却となり、その跡に勸泉寺は移った。その後、殿堂が大破し、天保期に再建ができないとして村から「豊寺」願いが藩に出され、廃寺となった。度志観音は弘法大師の伝承をもつことから、旅する人びとの関心をひいたのであろう。

度志観音の岩壁に仏像が彫られている。「水府志料 附録」(34)に収められた小宮山楓軒あて書状に次のようにある。

田尻村ノ岩ニ切付候仏像ノ儀御聞被成度旨、右ハ青龍山勸泉寺真言山中ニ有之由。度志観音ト申弘法大師岩屋へ切付候由申伝へ候。未ダ一見不致候。先日藤田次郎左衛門(幽谷)ヨリ右仏像ハ弘法ヨリモ古キ由糺呉候様頼ニ付、右近村老人杯所々承繕候所、一向ニ相分リ不申候

江戸時代において度志観音の岩壁に刻まれた仏像は弘法大師作との言い伝えがあつて、楓軒は「水府志料」編纂中に真偽を確かめようとして、ある人物に調査を依頼した。そのおり藤田幽谷から弘法大師よりも古いのではないかとも言われていたので、地元の古老に尋ねたところ一向にわからない、と調査者は楓軒に回答した。ところが昭和になると「常陸国風土記」にある「仏の浜」にとりわけ根拠もなく比定され、昭和二十九年(一九五四)に多賀郡日高村(翌々年日立市に編入)から県に指定申請がなされ、「佛ヶ浜(度志観音を含む)」として県指定史跡となった。

江戸後期の「田尻村絵図」に度志観音の東に隣あつて勸泉寺が描かれている。

栄蔵小屋については、多くの旅人が訪れ、さまざまな言い伝えを記録している。元禄十年(一六九七)の丹波国の国学者安藤朴翁の「ひたち帯」(35)に次のようにある。

川尻の浜など過て、栄蔵小屋といふ島山をみる。この島むかし八田尻村の山に続きたりしか、あらし波風にいつとなくつれたえておのつから島となれりとそ。西山公の好事にてこなたの岸より橋をかけてワタリ通ふに、橋の下四五丈もやあるらん。蒼波たゞへていとすさましく、股ふるひ、あなうら(足裏)しじまる心地そする。島ハミな岩にて、まわり六七町もやあるへき。数百本の松塩風におひさしほひつゝ見どころ多し。荒海の高しほ山の崩るゝことくにおそひかゝりて、たましゐもけぬへきやうにおほゆ。いつの頃にか有けん、栄蔵といふ法師この島に小屋を立ておこなひたるより、すなはち此名を付たりとそ

徳川光圀の「好事」(風流を愛する、といった意か)によつて栄蔵小屋のあるこの島に橋が架けられたというのである。元禄十五年の「常陸国絵図」(36)にこの橋が描かれている。

「岩城便宜」(10)には次のようにある。

栄蔵小屋向ニ鵜取島有。此辺のけしき不及言語、誠ニ別世界也。栄蔵小屋より田尻えの道有、十五六丁ともあり。(中略)俗説云、むかし蝦夷人來り此所ニ小屋を作り、鵜をとりてすきわひしと也。故に世俗ニえそ小屋と称と云り、また説ニ栄蔵と云もの此所にて鵜を取、すきわいし故、如此称と云。両説慥ならず。併蝦夷人の説珍敷故爰ニ記ス

滑川一里塚 天保十三年の「滑川村御検地絵図」に道標の先の坂道を上りきつた滑川村字社加原に「壱り冢 古桜有」と記載のある円形の土地がある(37)。街道をはさんだ反対側は山林で、塚は描かれていないことから滑川村の一里塚も片塚である。なお一里塚が描かれる地は現在住宅地となっている。

【図11 滑川一里塚 別掲】

田尻村種殿明神 田尻村の宿に入る手前西側に鳥居がある。鎮守種殿明神である。祭祀を行うのは村内にある山伏空窪寺である。種殿は十殿、丞殿等とも書き、茨城県北部の多賀郡から福島県南部にかけての山間部に分布する神社であ

る。祭られている神は農業や山の神、出雲系の大国主命など多様である(38)。

田尻宿 田尻宿は隣の小木津宿と交替で人馬継立を勤める。時期によって十五日と五日交替の時がある。田尻・小木津両駅の助郷村は滑川・砂沢・折笠・川尻の四ヶ村である(11)。

この宿の間屋は海野家である。海野家の庭松について「岩城便宜」(10)は「宿の間屋儀衛門と云者の庭ニ、高八尺ほどの作り松あり、枝葉の風流四方面無類の松也」とし、「水戸岩城道中覚」(?)は「水戸海道随一」と評した。しかし海野家が火災に遭って焼失した際に庭松も焼けてしまったという(10)。海野家にはこの松に関する史料が残されている(39)。

天保期、田尻宿には「旅籠屋二三軒ありて、奥津(小木津)にハ旅亭なし」という(27)。

宿を出ると急な上り坂になる。その峠は小木津村との境である。峠に上州屋と言う茶店があり、小麦饅頭が名物だった。隧道が掘られてこの峠道がなくなるのは明治二十年(一八八七)頃のこと、さらに昭和九年(一九三四)に切り通しとなった(40)。

峠道を下った右手(東側)に「自是栄蔵小屋道」と自然石に刻まれた高さ百三十センチメートルほどの道標がある。年号、建立者が彫られていないが、江戸時代のものである。岩城方面からやって来る場合は、この田尻境から栄蔵小屋への道をとることができる。

史料 享保十五年(一七三〇) 川上樸齋「岩城便宜」

小木津と田尻、五日代り馬次也、のほりの節ハ此所より度志観音、栄蔵小屋へ行、滑川へ出ル也、田尻より滑川迄本道ハ十八町、田尻より栄蔵小屋へ廻り半道の近也、宿の間屋儀衛門と云者の庭ニ、高八尺ほどの作り松あり、枝葉の風流四方面無類の松也、旅人足をとめすと云事なし、此所ニはたか島二ツあり

はたか島を見て 西行法師

あふ田尻衣はなきかはたかしま

海のしほかせ身にはしまぬか

「右問屋儀衛門近頃焼失せり、其節庭松類焼せり、仍今ハなし、今小木津問屋庭松、田尻におとらさる松也」

小木津宿 小木津駅の間屋は小貫家であった。小貫家の庭松も知られており、「岩城便宜」が「今小木津問屋庭松、田尻におとらさる松也」と書く。現在日立市の保存樹となっている。樹齢約三百年という。

天保十二年(一八四二)二月に検地のための予備調査にやってきた郡奉行所の役人は、小木津村の様子を「尚又駅場にて歩役繁く、往来為候て多分に人馬相費、臨時掛りもの多、甚難儀之村方に御座候」と記録している。小木津村は宿駅を担っているため、往来がはげしくなり、人馬が頻繁に動員され、臨時の経費も多くなり、難儀している村であるとされていた(1)。

【図12 小木津村の宿並】 【図13 問屋小貫家間取り図 別掲】

稲荷明神(澳津説神社)と稲峰寺 宿並が切れるあたりの東側に真言宗稲峰寺と稲荷明神があり、参道の奥に山門と鳥居があった。山門をくぐり左に稲峰寺、鳥居の先に稲荷明神がある(41)。

清荷山西福院稲峰寺は真言宗醍醐派総本山である醍醐寺、その五門跡である報恩院の末寺である。天文十三年(一五四四)に海慶が開山。天保期社寺改革のおり水戸藩は僧侶の出走を理由に廃寺願いを村から出させ、廃寺とした(11)。

稲荷大明神は稲峰寺の海慶が稲峰寺開山と同時に京都伏見の稲荷大明神を勧請したことに始まる。場所は宿の西方の権現山という山中である。万治元年(一六五八)に現在地に移る。元禄七年(一六九四)に小木津村の鎮守となった(11)。澳津説神社と社号が変わったのは明治十六年(一八八三)のことである(28)。三十六歌仙の絵馬が奉納されている。幕末から明治期のものとされる(42)。

小木津の宿を出て、海道は東に向かう。松並木が続く。

現在「浜街道」と称される日高小学校の北側を通る道路は明治になって設けられた。荷馬車の普及による傾斜のゆるやかな道があらたに造成されたのであろう。

江戸時代の海道はさらに北に進み、日高中学校の北側を通り、現在の国道六号を歩道橋で跨ぎ、北よりの道をたどった。

渚道 坂を下ると小木津浜の集落がある。

「岩城道中記」(4)は「坂の右下の方より田尻浜へ渚通りに行也、岩城よりかへりには此渚通りにて栄蔵小屋見物すへし」と旅人へ推奨している。これは小木津浜と田尻浜との間に渚道、すなわち海辺の崖下の砂浜に道があることを示す。この渚道は「伊師村より滑川村海辺図」や「宮田村絵図」など海辺を描いた絵図にも描かれている(43)。

正観音の窟 小木津浜の集落をすぎ、東連津川の土橋をわたると、その右手の岩壁に仏像が彫られている。

「水府志料」(6)の折笠村の条に「正観音の窟 海道の際にあり。弘法大師の作と申伝ふ」とあるが、仏像が「窟」に刻まれているのは折笠村ではなく境を接する東連津河口左岸の小木津村宇東連津内である。現在十二体が残るが、風化により像の種類がわからなくなっている。東連津河口一帯が「常陸国風土記」に登場する仏の浜との説がある(11)。

史料 享保十五年 川上樸齋「岩城便覧」

宿の右の方とうぶ(稲峰) 寺真言宗也、宿末松並有、坂下に宿有、狐船在之、此宿のはつれ少しの宿有、折笠新田と云

史料 天保十二年(一八四二) 森村新蔵「北国見聞記」

○奥津驛 田尻より纒四五丁、下十五日ハ奥津の月番也、此宿田尻に旅籠屋二三軒ありて奥津にハ旅亭なし、奥津より出て浜奥津、折笠新田杯云村過て川尻ニ至る、折笠新田ニ異国船遠見の番所あり

折笠浜一里塚 滑川村の一里塚からの距離からすると、小木津村内にあるべきなのだが、小木津村内には痕跡すら見当たらない。しかし海道が折笠浜の集落に下りる辺り、海道の東側にあった小山ではないか、と地元の人々が推測している(44)。現在この地は畑となっている。ここに一里塚があったとすると、この一里

塚も片塚である。

御用船 折笠・川尻浜は城米をはじめ水戸藩御用荷物の輸送のために使用された。寛永期(一六三三-一六四四)に藩から御用船に指定された川尻村の船は二十六隻、水主百一人に及び、水主は年間四日輸送に従事することを義務づけられた。この外久慈に三十八隻・百二十九人、水木に二十六隻・七十八人、河原子に十八隻、相賀(会瀬)に十九隻、それぞれ五十七人が指定され、米と粃を中心に木材や炭を運んだ(11)。

岩城海道が経由する漁村はこの川尻村だけである。水戸を出て勿来関まで湊・平磯(ひたちなか市)・久慈・水木・河原子・会瀬・伊師浜(以上日立市)・高戸(高萩市)・大津(北茨城市)・平潟などの漁村を通過することはない。この理由として考えられるのは、ひとつには人や荷を背にした馬が通行するには急坂が多く、地形的に不向きであったからであろう。小木津村から砂沢村・友部村・伊師本郷村を経由せずにあえて川尻村にたどったのは、公用荷物を海上輸送する機能を川尻村がもっていたからであろう。

【図14 折笠・川尻浜年貢米津出し絵図 別掲】

川尻村の宿並 「北国見聞記」(27)は川尻村を「此処駅宿にあらず。然共家数三百軒余ありて宿並なり。茶屋、旅籠屋も六七軒有」、「岩城道中記」(4)は「宿六七丁有、狐浜也。うら町・横丁よほど有。此浜海苔、身たたき、かつほふし名物也。札辻より前西側御殿有り。此宿末にうとん、ひさいもの有」と宿駅でないが、漁業が盛んで町場の様相をもっていることを記している。宿の長さは、助川宿の五町や枝川・植田・湯元の五から六町より長く、岩城道中で最も長い宿並を形成している。

川尻の宿並は昭和二十年(一九四五)のアメリカ軍の空襲によって海道より東側が焼失した。焼失した区域は戦後、戦災復興都市計画区域に指定され、区画整理が実施され、街路は新しく引き直された。西側の集落は焼失をまぬかれたため街路などは古いままである。

棚倉海道への道 川尻の宿並を抜けて道中を北に向かうと、高さ一メートルほどの寛政九年（一七九七）建立の馬力神がある。台石に「右いわき／道／左たなくら」とある。この道標は日立電線豊浦工場建設にともない移されたもので、元は工場敷地内にあったという⁽⁴⁵⁾。なお「馬力神」碑の建立時期は早すぎるとして年記銘に疑問が呈されている⁽⁴⁶⁾。

棚倉海道への道はこの辺りから友部村を通って西に向い、高原村で二つに別れる。ひとつは西へ向かい黒坂を経由して棚倉海道へ出る道ともうひとつは南にある笹目・入四間・中深荻を通って東河内で棚倉海道に出る二つの道筋があることが左に掲げる四つの道標から知られる⁽⁴⁷⁾。

(一) 高原には「右小里／左入四間／道」と刻まれている「黒田入口道標」（市指定文化財）がある。小里は中世の小里郷（常陸太田市・旧里美村）をさす。

(二) 黒坂には寛政十一年（一七九九）の「右ハ米平岩城道／左リこすけ（小菅）たなくら道」と刻まれた道標。

(三) 赤根（中深荻町）には文政十二年（一八二九）五月建立の馬頭観世音像に「右さゝ目（笹目）／左高原」とある⁽⁴⁸⁾。

(四) 菅（中深荻町）に文化四年（一八〇七）に建てられた道標に「右高原みち／右米平みち」とある⁽⁴⁹⁾。

天保十二年（一八三二）三月、領内北部の巡視にでた徳川斉昭一行が入四間村から川尻村に向かおうとしたが⁽⁵⁰⁾、その経路は入四間・笹目・高原・友部を経由する山道を想定していたことが、右の道標からうかがえる。

高原を経由して棚倉海道に出る道は、いずれもなだらかな山間の道を通る。この道は人ばかりでなく馬も川尻浜の魚などの海産物を背負って運ぶのに適していた。

友部川（十王川）にかかる土橋があり、長さ十一間、幅一丈、十王橋と名がつけられている⁽⁶⁾。

【図15 岩城・棚倉道標 別掲】

史料 享保十五年 川上樸斎 「岩城便宜」

民家多し 獵船有之、道中一番の浜也、左の方ニ御旅館有、宿より六七町磯の汀ニ小貝の浜と云所有、此所に五色の小石あり、御制禁にて取事ならず、宿を過流有、土橋掛ル、友部（川）と云、此河より先キ伊師町也

史料 寛延年間 著者不詳 「岩城道中記」

宿六七丁有、獵浜也、うら町・横丁よほど有、此浜海苔、身たたき、かつほふし名物也、札辻より前西側御殿有、此宿末にうとん、ひさいもの有、宿を出はなれ六七丁行バよほと山坂を登なり、此海道より半道東へ行、小貝浜也、色々の小貝、五色の小石よる、また砂ハ平素の砂より甚大粒にして金銀の如く光る、至景色よし

史料 天保十二年 森村新蔵 「北国見聞記」

○川尻村 奥津より一里、此処駅宿にあらず、然共家数三百軒余ありて宿并なり、茶屋、旅籠屋も六七軒有、外ハ皆漁父渡世なり

(34) 「水府志料 附録」 茨城県立歴史館写真版による。

(35) 「ひたち帯」 元禄十年 安藤朴翁（『道中記』による）

(36) 「常陸国絵図」 元禄十五年 国立公文書館デジタルアーカイブ

(37) 天保十三年 「常陸国多賀郡滑川村御検地絵図」 日立市郷土博物館蔵

(38) 笹岡明「ジュウドノ考」(一)～(三) 『郷土ひたち』第四一～四三号 一九九一～九三年

(39) 田尻明徳「田尻宿の歴史」 『郷土ひたち』第六四号 二〇一四年

(40) 水庭久尚「サヤト隧道と上州屋饅頭」 『ひたちの文化』第五九号

(41) 天保十三年 「常陸国多賀郡小木津村絵図」 日立市郷土博物館蔵

(42) 郷土史を学ぶ会『ひたちの絵馬』 二〇一二年

(43) 特別展図録『村絵図にみる日立』 日立市郷土博物館 二〇〇四年

(44) 豊浦の歴史編纂委員会『豊浦の歴史』 一九九八年

(45) 日立市郷土博物館『ひたちの野仏』第二集 一九八六年

(46) 笹岡明「馬力神の誕生」 『郷土ひたち』第五二号 二〇〇二年

- (47) 笹岡明「近世の道標と交通路」『ゆずりは』第八号 二〇〇二年
 (48) 水庭久尚「中里および隣接地域の道標」『郷土ひたち』第三号 一九八〇年
 (49) 十王町史編さん調査会『十王町史 通史編』二〇一一年
 (50) 「辛丑日録」 天保十二年 藤田東湖 (『道中記』による)

6 伊師町宿

十王坂 十王橋をわたり、坂を登りきつて台地上に出ると、西の伊師本郷村の集落と東の伊師浜村を結ぶ「磯道」と交差する。この交差する地点で平成二十六年に発掘調査が行われ、岩城道中の道路が発見されたという。両側に溝があり、溝間は約五メートルあったという。約三間、荷を振り分けた馬がすれちがうことのできる幅である。発掘調査報告書の刊行をまちたい。なお十王坂から伊師町まで道が「十王坂越」として平成八年文化庁の「歴史の道百選」の一つに選定された。

伊師町村一里塚 一里塚跡が伊師町村の宿の入口東側にある。これまで下土木内から伊師町村までの一里塚を見てきたが、多くは宿駅のまぢかにあることがわかる。逆にみれば一里塚の近くに配置した宿駅もあるのではないか。

宿に入ると海道中央に用水路がある。昭和三十九年に道路改良にともない西側に移された⁽⁵¹⁾。

【図16 昭和三十年頃の伊師町宿風景 別掲】
 愛宕権現手前の四つ角の西側に岩城方面を向いて寛延四年(一七五二)八月建立の「右入四間道」と自然石に刻まれた高さ四十七センチメートルの道標がある。

【図17 伊師町宿内入四間道標 別掲】
 この宿の助郷に指定されたのは、元治元年(一八六四)において伊師本郷・友部・山部・島名・秋山・福平の六ヶ村である⁽⁴⁹⁾。

浪花講 宿問屋は扇屋勘兵衛である。この扇屋勘兵衛は幕末に「浪花講」に加

盟していた。浪花講は大坂の商人松屋甚四郎が講元となって文化元年(一八〇四)に組織した全国の旅宿組合である。その松屋が発行した『浪花講定宿控』(文久二年十二月再版本)のまえがきに「諸事実意二御世話申、売女飯もり等決して進め不申候。是当講内の規定也。御安心にて御泊可被成候」と講を組織した意義を述べている。岩城道中の下土木内から石滝の間で浪花講に加入しているのは、森山宿の岩城屋繁平、下孫に米屋佐一郎、助川の米屋平次衛門、川尻の寿屋半兵衛、そして伊師町の扇屋勘兵衛である。扇屋の屋号をもつのは関家である⁽⁵¹⁾。

愛宕権現 「岩城浜街道中記」⁽⁵⁾に「あたこの一名石(伊師)町ともいふ」とあるように伊師町村は道中日記にはしばしば愛宕村として登場する。享保十五年の川上櫟齋「岩城便宜」⁽¹⁰⁾にも「此村(伊師町)を愛宕とも称ス」とある。隣には石滝村・伊師本郷村・伊師浜村がある。たしかに紛らわしい。それゆえよく知られた愛宕権現の名がいつしか旅人にとって村名となったのであろう。

愛宕権現は社伝によれば創建は天正四年(一五七六)、祭神は火をつかさどる神である。司祭しているのは真言宗法鷲院門徒の泉藏院だったが、元禄期の社寺改革により泉藏院は破却処分となり、大塚村(北茨城市)の修験善藏院に変えられた。正徳三年(一七二三)社殿を建て替えた際の奉納記録には、現在のいわき市・北茨城市・高萩市・日立市・常陸太田市の三十ヶ村、百七人の寄進者の名があり、広く信仰を集めたことが知られる⁽⁴⁹⁾。

愛宕権現を左に見て進むと、境内が終わる先の東側に自然石に「馬頭観世音」と刻まれた石仏がある。寛政十二年(一八〇〇)二月に建立されたもので、台座に「右いぶき山/左いわき道」と彫られている。「いぶき山」はこの石仏から北東の海岸にある国指定文化財のイブキの樹叢である。

なお水戸藩の天保改革時に伊師町と伊師浜と石滝の三ヶ村が統合して伊師村となった。

石滝坂 寛政十二年(一八〇〇)の本多忠籌「庚申紀行」⁽⁵²⁾に「愛宕の駅は海遠ふして波の響も聞へず。(中略)松原を過て石滝坂下り長し。麓に石滝村あり」

とある。「石滝坂」については「岩城浜街道中記」(5)も「石滝坂といふ大坂有」と記している。現在の坂道は屈曲しているが、現地には直線の坂道の痕跡が残っている。ここもまた石名坂同様に直線の坂道であった。屈曲するのは、明治に入って荷馬車が利用されるようになってからのことであろう。

そして道中日記や紀行文の中で、坂に名が与えられているのは石名坂とここ石滝坂の二つだけである。四十八坂がここで終わる。

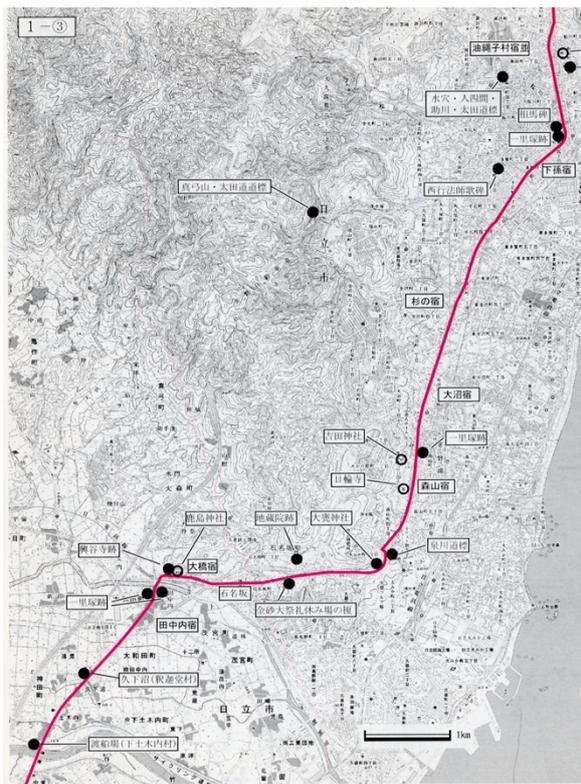
坂下に石滝村(53)の集落がある。集落を過ぎると花貫川があり、土橋が架かっている。その先は安良川の宿である。

(51) 十王町史編さん調査会『十王町史 地誌編』 二〇〇八年

(52) 「庚申紀行」 寛政十二年 本多忠篤(『道中記』による)

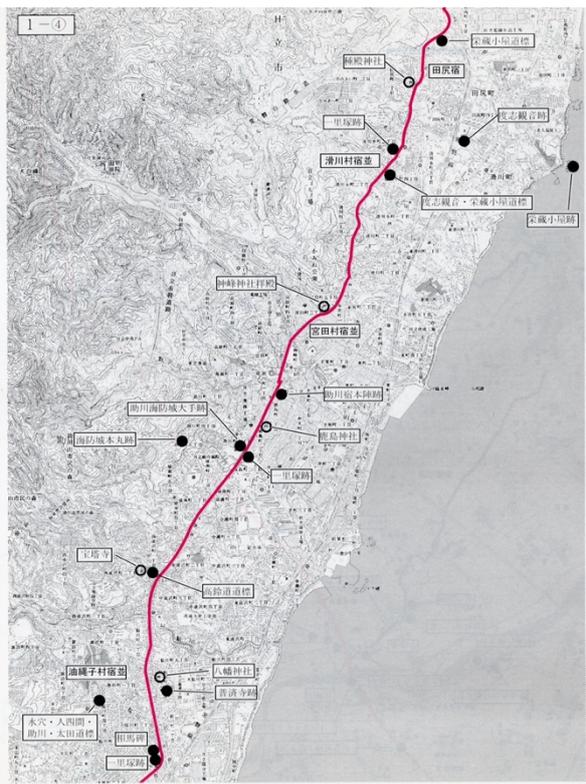
(53) 石滝村は現高萩市。石滝村は天保年間に伊師町村・伊師浜村と合村し、伊師村となる。明治二十二年町村制時に石滝は伊師村から分離し、となり安良川村や高萩村などと合併し、松原町を構成した。

岩城海道図



久慈川の渡し～下孫宿

『茨城県歴史の道調査事業報告書近世編Ⅲ』より



諏訪一里塚～田尻宿



田尻宿～石滝坂



図2 泉川道標 大甕神社前

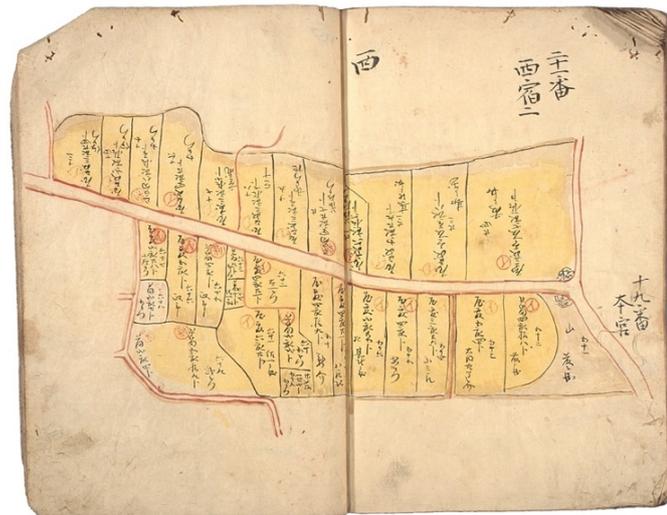


図1 田中内村の一里塚

慶応3年「久慈郡大和田村田畑反別絵図」より
 現在、通りは直進して茂宮川に橋が架けられているが、当時は絵図にあるように右（東）に折れながら土橋を渡った。そのすぐ先が大橋村である。



図4 相馬碑



図3 森山の一里塚 昭和32年(1957)撮影
スクーターが走る脇の小高い丘上のもの。国道拡幅によって半分削られている



図6 高鈴道標 「従是 高鈴道」



図5 村絵図に描かれた諏訪の一里塚
天保15年「諏訪村反別絵図」より

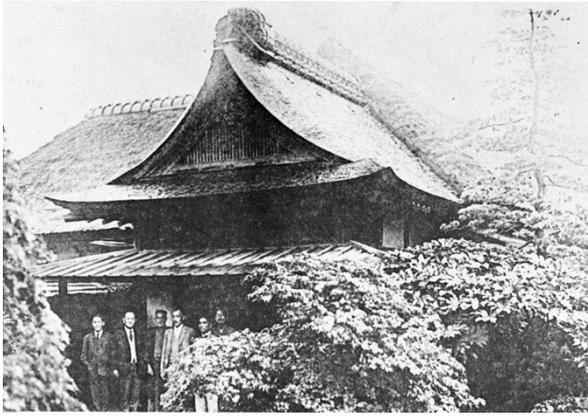


図8 本陣長山家 『郷土ひたち』第28号より
昭和20年の空襲で焼失



図7 田手沼の松並木
千葉忠也「日立地方往還の松並木始末記」
『郷土ひたち』第23号より
成沢側から助川方面を望む



図9 宮田村宿並図 江戸後期 『村絵図にみる日立』より
上が北。中央を岩城海道がはしる。往還の両脇に家並みが続く。西から東へ宮田川が村の中を流れる。手前の海道脇の溜池は助川村内

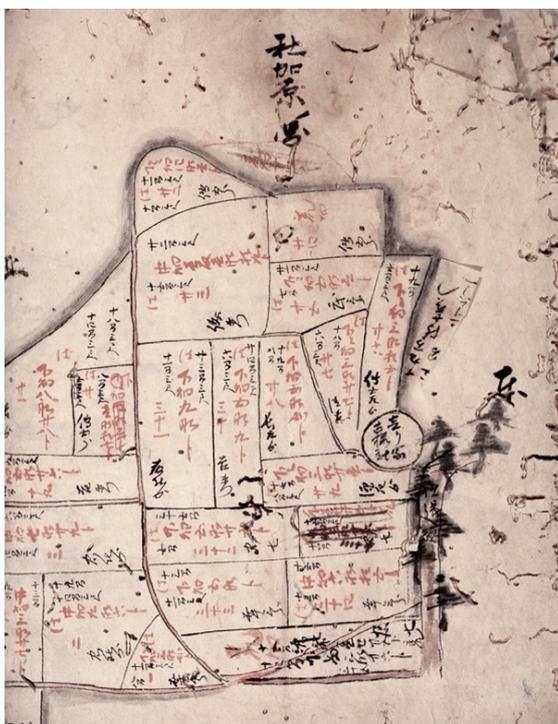


図11 滑川一里塚

天保13年「常陸国多賀郡滑川村御検地絵図」より
 上が北。松並木に囲まれた岩城海道は、一里塚の
 ところで坂道をくだる。



図10 度志観音・栄蔵小屋道標



図12 小木津村の宿並

『村絵図にみる日立』より

字本宿。道の中央を水路が走る。

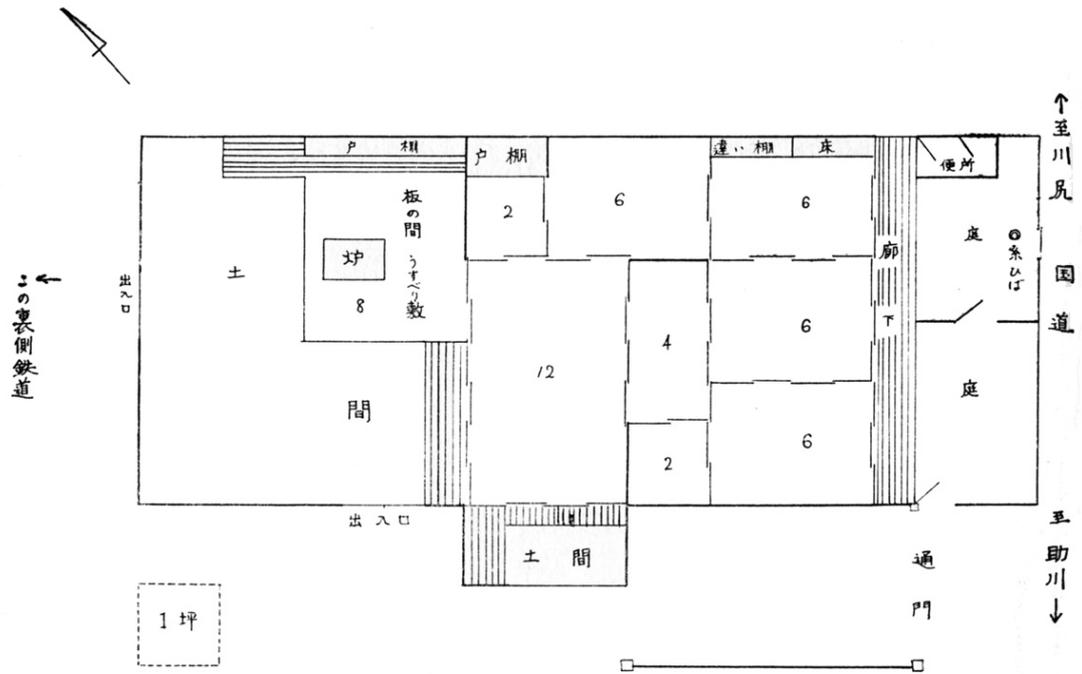


図13 宿問屋小貫家の間取り図 『日立市史』より



図14 文久3年 折笠・川尻浜年貢米津出し絵図 日立市郷土博物館蔵
折笠村と川尻村の民家が軒を接してつらなる。砂浜に俵を積み上げ、舳を使って沖の元船に運ぶ様子が描かれる。山上に異国船遠見番所、崖下に年貢米を保管する洞穴があり、その前に砲台がある。



図 16 昭和三十年頃の伊師町宿風景 『十王町史地誌編』より
街道の中央に水路、奥に愛宕神社の鳥居が見える。



図 17 伊師町宿内入四間道標



図 15 岩城・棚倉道標
台石に「右いわき 左たなくら」とある。

表 宿駅の大きさ 寛延年間「岩城道中記」より

宿駅名	宿並の長さ
枝川	五・六町
〈田彦〉	二町
沢	四町
石神	四・五町
田中内	三町
大橋	三町
森山	三町
大沼	四町
〈金沢新田〉	二町
下孫	三町
助川	五町
〈滑川〉	二町
田尻	二町半
小木津	二町半
〈折笠新田〉	一町
〈川尻〉	六・七町
伊師町	三町
安良川	記載なし
高萩	記載なし
〈赤浜〉	二町
〈小野矢指〉	三町
足洗	四町
〈下桜井〉	三町
神岡	記載なし

茨城県歴史の道調査事業 日立市域報告

二〇二二年九月一日

島崎和夫